

『我が身にたどる姫君』の帝たち

大塚 千聖

はじめに

中世王朝物語『我が身にたどる姫君』（全八巻）には、左のよう
な一節がある。

「我が氏に多くの后・国の親の出でものし給ひしかど、氏の大
明神に我れほど心ざし奉りて仕うまつりし人やはおはせし。こ
れ横ざまのことを構へ祈るにもあらず。我が家・国の継ぎを伝
え給ふべき御上なり。前の世の報い・この世の犯しなりとも、
山階寺の本尊立ち翔り給へ」と、まさなきまでのたまはせ続く
るに、神仏もげにやと思すらむ、（藤壺は）すこし御目開けて
うちみじろぎ給ふ。
（巻四・二二八頁）

これは、水尾帝の中宮（以下水尾中宮）が、第一皇子出産時に物の
怪に苦しむ孫娘・藤壺を抱きながら祈願した際の言葉である。水尾
中宮は、摂関家から入内し皇子を産み国母となつた女性で、「我が
家・国の継ぎを伝え給ふべき御上なり」という言葉からは、摂関家
の女性に皇子を産み国母となるべき存在であるとの摂関家の論理が
読み取れる。また、「山階寺」という言葉から「我が氏」が藤原氏
であることも分かる。

本作における摂関家の論理は水尾中宮の言葉だけでなく、

関白殿の御あたりいかにも一方はあるべきさまなれば、なみ
なみの更衣などだに参り苦しうするに、まして氏のほかの后は、
女院（水尾中宮）いみじう御いさめあるにより、思し召し扱ふ
べし。
（巻四・一八二〜一八三頁）

という、皇女の入内を打診された帝（我が身帝）が、自身の息子（三
条東宮）の後宮に入内させようと思案するも、摂関家から入内した
后が一人もいないことを理由に躊躇する言葉や、「かぎりありて我
が氏を継ぐべかりける宿世のこよなきにこそ、かばかりも交じらひ
聞こえけむ」（巻五・二七頁）と、皇子を産み氏を継ぐために入内
したと自身の境遇を冷静に見つめる藤壺の言葉など随所に散見され、
本作を貫くものと考えられる。

金光桂子氏は、史実上の摂関政治全盛期であつた一条・三条・後
一条・後朱雀・後冷泉の五帝をめぐる皇位継承史が、本作の水尾・
嵯峨・我が身・三条の四帝のものとの緊密に対応することを指摘して
いる。后妃の数や皇子・姫宮の数、『栄花物語』に描出されている
各后の性質など大部分が一致することから、本作は摂関政治及び
『栄花物語』を強く意識して成立した作品であるといえる。しかし

の皇女である皇后の宮とでは、後宮における立場が異なることは推測できるが、ここで重要なのは対立する水尾中宮も父を亡くしていることである。水尾中宮には兄・関白が存在し、皇后の宮を圧倒することは可能であった。しかし、当の関白が皇后の宮に強い愛情を抱いていたため、皇后の宮存命中の両后の力関係は均衡な状態であった。

このような状況で、水尾帝の皇后の宮寵愛により問題が起きたという描写は存在しない。力関係に変化が見られるのは皇后の宮亡き後で、帝に対しても「我が聞こえ給はむことを、いささかもとどこほるべきものと思しかけぬ」という水尾中宮は、自身の娘・女四の宮を兄の息子・三位中将のもとに降嫁させるよう、水尾帝に強引に迫った。

【系図一】



右の系図のように、皇后の宮亡き後に母親不在となった女三の宮に對して、女四の宮には伯父の関白が健在である。水尾中宮だけでなく関白という後ろ盾を持つ女四の宮の降嫁に、水尾帝は

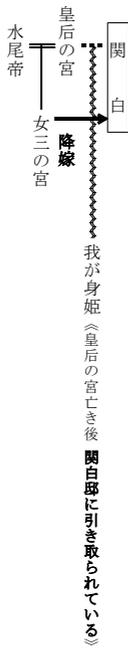
(女四の宮には) 后(水尾中宮) もうち添ひおはします。さら

でも関白などのゆめおろかなるまじき御身を、これはかからでもすぐせ給ひなむと、ふさはしからず思さるれど、(水尾中宮に) なかなかなることをかうも見えじと思しつみて、いとよきことうけひかせ給ふ。(巻二・八六頁)

と内心は反対するものの、何も言わず中宮に賛同するのである。

この段階では水尾中宮の言いなりになった水尾帝だが、決して女三の宮のことは見捨てた訳ではなかった。紆余曲折を経て女四の宮が三位中将のもとに降嫁した後、水尾帝はその隙をつくような形で、関白のもとに独断で女三の宮を降嫁させたのである。関白の元で暮らすようになった女三の宮は、皇后の宮と関白の間の不義の子・我が身姫と出会う。我が身姫は、皇后の宮亡き後に関白邸に引き取られていた。

【人間関係図A】



我が身姫は、降嫁してきた女三の宮と対面したことで

かたみにあさましようぞおどろかれ給ふに、(我が身姫は) 我が御鏡の影はなほあまり見馴れ給へるも思し分かるるにや、世とともに忘れず恋しき御影を見つけたる心地のみし給ふに、おほかたかなかりし御行方もかたへは心得られ給ふ。

(巻三・一四一頁)

と自身と瓜二つの女三の宮を見て、これまで確証を持っていない自分の母親が皇后の宮であることを確信した。以後我が身姫は女三の宮と信頼関係を築き上げ、三条帝の御代では水尾中宮・女四の宮母娘と対立していくことになる。水尾帝が水尾中宮に逆らわなかったこと、及び独断で女三の宮の降嫁を遂行したことが、結果的に我が身姫と女三の宮の出会いをもたらしているのである。

(2) 女帝誕生と嵯峨帝

次代・嵯峨帝の御代では、関白の女君（後の嵯峨女院）ただ一人が入内・立后し、「並ぶ人もおはせねば、何の映えかあらむ」（巻三・一二六頁）という状況であったため、後宮をめぐる力関係の変化も后たちの対立もみられない。退位後の描写で、

ただいとしづかなる御住まひを好ましく思召しければ、御かうぶりをさへは、えいとせ給はず。皇后の宮（嵯峨女院）の御おほえ、年経れどいやめづらかにて添ひおはします。姫宮一所ぞ持たせ給へる。
（巻四・一八一頁）

とあることから、嵯峨院は自身の皇統を継ぐ皇子を持つことなく、唯一の後である嵯峨女院を寵愛し続けていたことがわかる。皇子を持たない帝ならば他に后を迎えるべきだが、皇后の宮腹の皇子である嵯峨帝は、水尾中宮にとつていわば敵方の皇統である。水尾中宮には女四の宮だけでなく皇子（後の我が身帝）もおり、その皇子の即位を確実にするためにも、嵯峨帝皇子の誕生は回避すべきである。入内したのが水尾中宮の血縁にあたる関白の娘であったため、関白家の繁栄を第一とする水尾中宮が他家の娘の入内を認めるとも考えにくく、嵯峨帝の在位中に水尾中宮が政治的な介入をした可能性は

皆無といつて良い。

皇子不在により自らの皇統が途絶える可能性に対して、嵯峨帝は「我が世の末なくてやみぬる御あはれみにもとて、押し立ち思召し立ちてまた参らせ給ふ」（巻四・一九〇頁）と、姫宮（承香殿）を三条帝の後宮に入内させた。承香殿が三条帝との間に子を成すことはなかったが、「御心せちに清らにおはしまして、昔の祖母上の御心にや、いささかもまさなき御恨みなどまじらぬ」（巻四・一九二頁）承香殿を三条帝が好ましく思う描写は数多く見られ、結果的に「嵯峨の院の御心掟をはじめ、皇后の宮（承香殿）の御ことをなほいとみじう思ひ聞こえさせ給ふあまり」（巻四・二二五頁）と女帝に位を譲ることを決意したものだと考えられる。嵯峨帝が嵯峨女院以外の女性を見せめることなく、一心に寵愛したことは、後の女帝誕生への布石であったといえるのではないか。

(3) 皇統の断絶を防ぐ我が身帝

水尾中宮出生の皇子・我が身帝には、我が身姫ただ一人が入内している。一人の後を寵愛するという点では先帝・嵯峨帝と共通するものの、皇子一人、姫宮二人を儲けており、皇統断絶の可能性は極めて低いものといえる。嵯峨院から姫宮（承香殿）の入内を持ちかけられた我が身帝は、

我が御代はいとかりそめにのみ思召さるるうへに、たはぶれにも分くる御心しおはしまさねば、東宮（後の三条帝）にこそはと思召すも、関白殿の御あたりいかにも一方はあるべきさまなめれば、なみなみの更衣などに参り苦しうするに、まして氏のほかの後は、女院（水尾中宮）いみじう御諫めあるによ

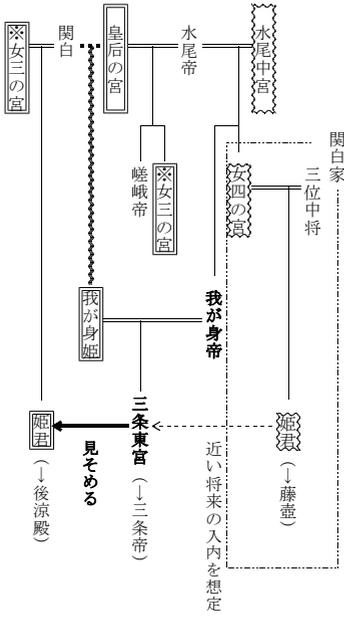
り、思し召し扱ふべし。

(巻四・一八二頁)

と我が身姫一人を寵愛したいがゆえに、自身の後宮への入内を認めない。代わりに息子・三条東宮の後宮に入内させようと考えるも、母・水尾中宮の意向に逆らってまで事態を推し進めようとはしない。しかしながら、この「水尾中宮に従順である」という非常に受け身な性質が、次代となる三条帝の皇統の断絶を防ぐことに繋がったと考えられるのだ。

女三の宮の娘・後涼殿を、三条東宮が密かに見そめたことを知った水尾中宮方は激怒し、関白家の后がねである藤壺(水尾中宮の孫)を即座に入内させた。婚前の娘が東宮と密かに契りを交わしていたことを知った女三の宮は、協力関係にあった我が身姫と共に後涼殿の入内計画を密かに進めてはいたが、水尾中宮方の勢いに押される形となる。

【人物関係図B】
水尾中宮系統の女性
皇后の宮系統の女性
をそれぞれ囲んでいる。



女四の宮の暴挙を知った我が身姫は、我が身帝に抗議するも、中宮(我が身姫)もいみじく思し召し嘆きて、内にもこのことのみさ聞こえさせ給へど、女院(水尾中宮)のみち思しおきてたるすぢなれば、たがへ聞こえむにおそろしうて、ただあるかぎりあきれたり。(巻四・一八八頁)

我が身帝は水尾中宮の存在を恐れて一切逆らうことが出来ない。女三の宮に対しては「かしこき御代にもひとりやはさぶらふ。いましてづかにこそかれをも参らせ給はめ」(巻四・一八九頁)と、后は一人と限った話ではないのだからこれから後涼殿を入内させれば良いとの言葉をかけている。

三条帝は藤壺よりも後涼殿を寵愛していたものの、後涼殿は最後まで帝との間に皇子を儲けることがない。計四人もの后たちが入内しているにも拘わらず、皇子を産んだのは藤壺ただ一人であった。仮に我が身帝が我が身姫の意見を聞き、水尾中宮方の強引な藤壺入内を阻止していた場合、三条皇統は断絶していた可能性が高いのである。母・水尾中宮に従順な我が身帝の態度は、結果的に藤壺の入内を後押しする機能を果たすもので、息子・三条帝の皇統の断絶を防ぐことに繋がるのである。

二 三条帝

(1) 人間関係の不和を引き起こさない三条帝

水尾帝が異母姉妹の再会をもたらしただことで、三条帝後宮への後涼殿入内をめぐる女三の宮と我が身姫の連携が生まれ、嵯峨帝が三条帝後宮に姫宮を入内させたことで女帝誕生への布石が打たれた。さらに我が身帝が藤壺入内を後押ししたことで皇統の断絶が防がれ

たという具合に、先代の帝たちの行動は、全て三条帝の御代に収斂されるものであった。三条帝の後宮には、嵯峨帝の同母兄弟の娘である麗景殿、関白家の藤壺、女三の宮の娘・後涼殿、嵯峨帝皇女・承香殿が入内しており、最後に入内した承香殿に対して三条帝は、

（三条東宮は）これ（承香殿）もいとおろかに思ひ聞こゆべく

もあらず。あてになまめかしう清らなる御さまを、浅香の沼にのみ御身を分けまほしう、隔つる夜な夜なは、いづ方にもいと苦しう思さるるにぞ、上（我が身帝）の御宿世はいとうらやましう思し召さるる。女院の御心のさがなさも、若き人々にてあなづらはしう思さるるにや、はばかりとなくのみなりまさらせ給へば、なほ大殿の御方（藤壺）はさらにも聞こえず、重き御おほえなり。

（巻四・一九〇〜一九一頁）

と心惹かれており、そのうえで藤壺を殊に丁重に扱ったとされる。水尾中宮の存在の大きさをゆえに藤壺を重んじていた三条帝は、藤壺が第一皇子を出産した際も「片つ方の御胸はふたがるべし。（藤壺の）いとど動きなき御さまを思し召すも、誰が御過ちならず心苦しうぞ思さるるままに、後涼殿に渡らせ給ひぬ」(巻四・二一九頁)と皇子誕生を手放して喜ぶことができずに後涼殿のもとへ向かっており、水尾中宮が存在しなければ藤壺が重んじられることはなかったと言えよう。我が身姫だけを寵愛する父・我が身帝のようにただ一人の后を寵愛したいということが本心で、複数の后が入内している状況は、彼にとっては不本意なものであった。

三条帝にとって祖母・水尾中宮の存在は、母・我が身姫以上に大きいものであった。藤壺入内の後、「後涼殿の」なほ行く末頼もしき有様なり」(巻四、一九二頁)と評されるほどに後涼殿を寵愛し

ながらも、彼女の立后は「女院の御掟いとどしうのみなりまさらせ給へば、いみじきことを思し召せど、まづ藤壺・承香殿、后に立ち給ひぬ」(巻四・一九一頁)、「いま一際の位をいいかで動きなくとのみ思し召したれど、中宮（藤壺）の御里住みのほどは、なかなかよろづ思し召し立たれぬなるべし」(巻四・二二一頁)と水尾中宮の手前を憚って退位直前まで見送られ続けた。彼も父・我が身帝同様、水尾中宮との間に軋轢を生んでまで自らの意思を通そうとはしないのである。⁵⁾

中世王朝物語において、帝が意思を押し通したことで人間関係の不和が引き起こされる例は散見される。例えば『苔の衣』の帝は、所望していた右大臣娘が苔衣大将に娶られたことを根に持ち、弘徽殿の姫君を苔衣大将のもとに降嫁させ、夫婦の仲に亀裂を入れる。降嫁の後、苔衣の北の方は発病の末に亡くなり、悲嘆に暮れた苔衣大将は出家した。

『石清水物語』では、女君（宮の上）を強奪する帝が描かれている。……うしろめたくはいかがとて、仰せ言を背侍りしかば、（人）には、知らせ給はで、御心とかまへ出させ給へる。後にこそ知らさせ給ひて侍れ。『宮、もしたひらかにおはしまさば、いかがさせ給ふべき』と奏し侍りつれば、（帝は）『年ごろ、我こそ標さしたりし人を、横取られたる宮なれば、もとの主なれば力なしとてこそはあらめ』と、ことなしびにこそ仰せられ侍れ。

（下巻・二二九頁）

宮の上は、夫・中務官危篤の知らせを受けて彼の元に向かう道中で帝に強奪される。臣下の協力を得られなかった帝が、自ら計画を立て一人で実行した事件であった。中務官が回復した場合、宮の上を

どのように扱うのかと臣下から尋ねられた帝は、元々は自分に入内させる予定だったのだから問題ないと答え、周囲の反応を余所に彼女を藤壺に押し込めて昼夜問わずに寵愛した。

『苔の衣』や『石清水物語』の帝のように、三条帝が自らの欲望のままに行動したら、物語はどのように展開したのであるうか。後涼殿ではなく藤壺が第一皇子を出産した際に、「いみじき御おぼえにもかぎりある御宿世はよらぬにやとぞ、なほめでたきや」（巻四・一九二頁）と皇子の出産は寵愛が深い后ではなく摂関家から入内した後に定められる宿世である、との認識が作中に示されている。三条帝が後涼殿立后を押し通して、他の后たちには目も向けずに彼女だけを寵愛した場合でも、後涼殿が皇子を産んだ可能性は低いとみて良いだろう。となると待ち受けるのは皇統の断絶である。水尾帝から我が身帝までの三帝が繋いできたものを壊すことなく、後宮をめぐって人間関係の不和を引き起こさないことが、三条帝に課せられた役割なのではないか。なお「人間関係の不和を引き起こさない」という特徴は、三条帝のみならず水尾・嵯峨・我が身の三帝にも共通するもので、本作に描かれる帝像の特徴の一つであるといえよう。

(2) 外的要因によって「賢帝」となる三条帝

三条帝は藤壺出生の第一皇子の御五十日の場で、

例のはなばなと若うをかしげにて、さるまさなきわざせさせ給へらむとも見えぬ御さまを御覧するにも、押し返しこは人のせしことか、かかる宿世のおはせむを、我やは思ひ悩むべきなど、罪なくぞ御覧じなさる。まためづらしさには、御おぼえもこよなきにつけて、嵯峨野の御さびしさはまづ思しやらるべし。

(巻四・二二〇頁)

と「はなばな」とした藤壺の様子を見るやいなや、後涼殿ではなく藤壺腹での皇子誕生を人為によるものではないと聞き直る。その後、嵯峨野に里下がりをしていいる承香殿へ思いをめぐらせ、「これ（麗景殿）も絶え間はいと恋しうのみ思し召されて、「とくとく」と聞こえさせ給へば、年の暮つ方参らせ給ひぬ……例の内のわたりいとぞひまなき」（巻四・二二二頁）と一番寵愛の薄い麗景殿をも呼び寄せた。第一皇子の誕生を経た三条帝は、後涼殿のことを丁寧に扱いながらも、それまで以上に他の三人の后にも心を配るようになる。結果、麗景殿は姫宮を出産し、藤壺は第二・第三皇子を出産している。

水尾中宮に従順であるためとはいえ、摂関家を出自とする身分の高い后を重んじ、複数の后に公平に心を配る三条帝の在り方からは、『采花物語』に描かれる

……そこの女御、御息所参り集りたまへるを、時あるも時なきも、御心ざしのほどもこよなければ、いささか恥がましげに、いとほしげにもてなしなどもせさせたまはず、なのめに情けありて、めでたう思しめしわたして、なだからに掟てさせたまへれば……
(月の宴・二〇頁)

という村上天皇の振る舞いすら想起される。本作よりも成立が下る中世王朝物語『風に紅葉』でも、

上は限なうおはしまして、采女が際までも、かたちをかしききば御覧じすぐさず。御片方もあまた候ひ給ふを、いづれも御なさけありて、もてなさせ給ひて、その上に后の宮の御心ざしはたぐひなければこそ……
(上巻・十一頁)

の通り、様々な女性に情けをかけたつ身分の高い後の宮を大切にす
る帝と、一人の女性を偏愛する東宮とが対比する形で挙げられ、帝
の振る舞いが評価されている。平安期に見られた「賢帝」の概念は、
鎌倉後期以降の成立の中世王朝物語にも受け継がれている。

後涼殿一人を寵愛しようとしながらも、「浅香の沼にのみ御身を
分けまほしう、隔つる夜な夜なは、いづ方にもいと苦しう思さるる」
（巻四・一九〇頁）と他の三人の后にも惹かれ、藤壺との間に自らの
皇統を継ぐ皇子をもうけた三条帝の姿は、「賢帝」として描出され
ているのではないか。複数の后が入内している状況は、帝自身が
望んだものではなく様々な外的圧力をかけられたことにより生じて
いる。しかしながら、三条帝が外的圧力を受け入れ、人間関係の不
和を引き起こすことのない「賢帝」として矯正された結果、皇統の
断絶は防がれたのである。

三 悲恋帝と新帝

水尾中宮の存在により、行動を制約されていた水尾帝から三条帝
までの四帝の御代とは異なり、水尾中宮崩御後の悲恋帝・新帝の御
代では、帝自身の意思に沿った行動が目立つようになる。

関白家に后がねとなる娘が存在しなかったため、悲恋帝の後宮に
は他家の娘が一人だけ入内していた。

上は何のたどりもなく、幼き御心に、いとくちをしう思し召さ
る。院の御代の苦しきまで思し乱るめりし御方々、中の劣りの
宮の女御（麗景殿）の御ほどを思し召すに、御子の御おほえ、
右大将（宮中将）の顔かたちなどを御覧じ合はするに、いと屈
じいたければ、大宮（藤壺）にさるべきついでやありけむ、「さ

るべき人々侍らずは、かならず女御参らずとも侍れかし」と、
ものしげに思し召したるを……（巻七・一三八頁）

幼さゆえにそのような事情を理解できない悲恋帝は、自身の后と、
三条帝の後宮で一番寵愛が薄かった麗景殿やその娘などを比較し
て自らの后への不満を高めていった。悲恋帝は、「さまざま院（三
条帝）はさてこそおはしましけめ。さばかりならむ人を見なれむは、
世にあるかひなくこそ」（巻七・一三九頁）と「賢帝」であった三
条帝の後宮を理想と考えており、この不満が後の悲恋に繋がるので
ある。

我が身姫出生の一品の宮で独身を貫いていた皇太后の宮への恋慕
を募らせた悲恋帝は、彼女と強引に契りを結ぶも、我が身をいとわ
しく思つた皇太后の宮は飲食を断つことにより自死を選び、それを
知つた帝も後を追う形で絶命した。悲恋帝の次に即位したのが弟の
新帝で、彼は宮中のみならず世間をも騒がせた兄の事件を教訓とし
て聖代を築こうとする。その姿勢は後宮運営にも反映され、

もとより参り給へる按察使の大納言の姫君・式部卿のなど、さ
るは過ぎ給ひぬるおほき大殿の女御にいくらのまさり給へる顔、
かたちもおはせねど、見初めつる契りをあはれと思し召せば、
いとなだらかなる御もてなしにて、さまよくまうのほり給ふ。

（巻八・一八六頁～一八七頁）

と入内した姫君に対して公平な態度を取つた。後宮運営においても、
三条帝とは異なり自らの意思で「賢帝」として振る舞おうとする。
三条帝の後宮に憧れ強く影響を受けた悲恋帝から、兄の悲劇を教訓
として聖代を築こうとする新帝。水尾中宮亡き後の二帝は、周囲か
らの影響ではなく先代から影響を受ける形で、それぞれの御代を築

いているのだ。

新帝は生まれてすぐに女帝の養子となっている。これは女帝が「せちに聞こえさせ給ひて」（巻四・二二五頁）と願ったためで、讓位の際にも女帝は自身が相続したものを悲恋帝ではなく新帝に譲渡している。新帝が病に倒れた際にも、兜率天に往生した女帝が生前の姿で地上に現れており、女帝の後継者として新帝が想定されているといえよう。新帝の御代には、三条帝と藤壺の間に誕生した第三皇子が東宮として立つており、嵯峨皇統から再び三条皇統へ復帰することは確定している。物語最終巻の巻八で左右大臣家の融和状態が描かれていることから、当面の間は平穏な状態が続くと読めるのである。

おわりに

水尾中宮の影響を多分に受けて行動が制約されていた水尾・嵯峨・我が身の三帝は、彼女の行動の隙間を縫うような形でそれぞれの役割を果たしていた。それらの成果は三条帝の御代に実を結び、女帝誕生や皇統の存続を実現させる。当初、父・我が身帝のように一人の后を寵愛したいと考えていた三条帝は、水尾中宮をはじめとした外部からの圧力により、藤壺との間に皇子をもうけて自身の皇統を存続させ、入内した全ての后に心を分ける「賢帝」となっていく。三条帝の華やかな後宮は悲恋帝の悲劇を生む原因となるも、その悲劇を教訓として新帝は聖代を築こうとした。それぞれの帝たちの取った行動は連鎖し合い、全て新帝の御代へと繋がっているのがある。

悲恋帝以前の帝たちの行動には、全て水尾中宮の存在が大きく関

わっていた。撰閲家の論理を体現する水尾中宮の行動は、強引さが目立つものの撰閲家の立場の人間からすれば取ってしかるべき行動だといえる。仮に水尾帝が水尾中宮の意向を無視して三位中将のもとに女三の宮を降嫁させていれば、藤壺が三人もの皇子を出産することもなく、嵯峨帝が姫宮を三条帝に入内させていなければ、女帝から新帝への聖代の継承は行われない。三条帝が水尾中宮の意向を無視して後涼殿だけを偏愛していれば、その時点で皇統は断絶していた。帝たちが欲望のままに行動をしていれば、物語は早々に撰閲家の論理から逸脱していただろう。水尾・嵯峨・我が身・三条の四帝に求められた役割は、第一に水尾中宮の行動を妨害するような行為を一切行わないこと、第二にそのうえでそれぞれの役割を果たすことであつた。

本作では、帝たちが権力を誇示するような場面が存在しないため、女性でありながら権勢を誇る水尾中宮の姿ばかりがクローズアップされがちである。しかしながら、人間関係の不和を引き起こすことなく、次代へと収斂されていく行動を選択する帝たちの存在があつてこそ、途切れることなく七代・四十五年にわたる撰閲家と皇統をめぐる物語は織り成されているのである。

注(1) 金光桂子『我が身にたどる姫君』の描く歴史(上)〔国語国文〕六

九巻九号、二〇〇〇年九月 初出 及び『我が身にたどる姫君』の描く歴史(下)〔国語国文〕六九巻一〇号、二〇〇〇年一〇月 初出

(2) この点に関しては、金光氏も『我が身にたどる姫君』の描く歴史(上)の中で「先に検討した史上の皇統譜との対応にしても、多くの場合個々の天皇の素質や事跡というよりは、后妃とその皇子女を含めた後

宮の有様に基づいていたのだが、『我身』が『栄花』から得たものは、素材としての史実に留まらなかったと思われる」と述べている。

- (3) 辛島正雄「『我身にたどる姫君』の女帝―物語史における女主人公の系譜―」（『徳島大学国語国文学』二号、一九八九年三月 初出）、金光桂子「松浦宮物語」と『我身にたどる姫君』―聖代描写について―（『人文研究大阪市立大学文学部紀要』五二巻、二〇〇〇年十二月 初出）、金光桂子「『我身にたどる姫君』女帝の人物造型―兜率往生を中心―」（『国語国文』六八巻八号、一九九九年八月 初出）、木村朗子「女帝の生まれるとき―」（『言語情報科学』二号、二〇〇四年 初出）、小島明子「我が身にたどる姫君』の女帝像―女性往生者の投影―」（『中世王朝物語の新研究―物語の変容を考える』新興社、二〇〇七年）などが挙げられる。

- (4) 後涼殿も父が関白ではあるが、彼女の入内時には故人となっており、母・女三の宮と女三の宮の同母姉妹・我が身姫が後見を務めているため、女三の宮の娘と表記している。

- (5) 三条帝は、後涼殿が宮中将と密通していたことを知っても、「三条帝は文を」うち返し僻目ならむと御覧するに、まづ心憂きはさしおかれて、よしなきものを取りてけるかな、見つけていかにはしたなく思さむと、いとほしきにうちぞ泣かれさせ給ひぬる……知りけりとも知られぬわがもがなとさへわびしう思し召さるれど……よろづのことは忘れて、ただひまなくもてなすばかりとのみ思し召しとれば、これにしも御心ざしまさるべし。（巻四・二二三―二四頁）と文を見てしまったことに対する嫌悪感を抱きつつも、後涼殿の心情を一番に慮り、後涼殿を責めるようなことは一切行わない。そればかりか、後涼殿の側を離れないようにすることで、以後他の男性の侵入を防ごうと考えている。間男が宮中将であることを理解した後も、「（宮中将は）内にも久しく召しなどもなければ」（巻四・二二三頁）と特に制裁を加えるでもなく、ただ宮中から

遠ざけるのみであったとされ、後涼殿への寵愛が醒めることもない。密通発覚後に三条帝が宮中将と後涼殿に制裁を加えていた場合、宮中将が右大臣になることもなく、巻八に描かれる左右大臣家が協力し合って天皇家を支え合うという大団円も描かれることはなかったものと思われる。以上、密通という観点から見ても三条帝の行動は、やはり人間関係の不和を引き起こすことはないのである。